大正期における日本海軍の恒例観艦式

木村美幸

日本史学専門 博士前期課程 2年

I はじめに

帝国日本海軍が行った大イベントに観艦式がある。観艦式は天皇の即位記念や軍事演習の締めくくりとして、海軍艦船を天皇が親閲する儀式であるが、時代を経るごとに国民が海軍の軍艦を拝観する「海軍イベント」として機能した。この儀式は天皇—海軍—国民をつなぎ可視化する重要な儀式であるにもかかわらず、部分的に扱った研究はあるものの、正面から扱った研究は管見の限りない¹⁾。また、この観艦式は報告者が関心をよせる海軍の宣伝活動や、海軍と地域の関係性を考える上においても重要な行事である。よって、本プロジェクトでは観艦式について取り上げ、基礎的な事項から観艦式が地域とどのような接点をもったのかを明らかにすることを目的にし、横浜・神戸の地方新聞や公文書・パンフレット類の調査を行った。

観艦式は全部で18回行われているが、限られた紙幅ゆえにそのすべてについて論じることが出来ない。このため、本稿では大正期の一時期に行われた形式である「恒例観艦式」を扱う。恒例観艦式は観艦式規程が制定された1913年にはじめて導入されたにもかかわらず、わずか6年で廃止されてしまう。それでは、何故この時期に制定され、何故6年という短期間で廃止されてしまったのか。この点を検討することは観艦式の歴史やこの時期の海軍を考える上で重要である。また、観艦式規程はこのあと大きく変更されることなく1945年をむかえており、恒例観艦式の導入・廃止は戦前の観艦式の最も大きな制度面の変化であった。そして、恒例観艦式の導入には内外からの批判も見られたのである。

このため本稿では、観艦式の基礎的な事項を確認した上で、大正期に行われた「恒例観艦式」について1913年の制定から1919年の廃止までを検討したい。

II 観艦式概要

観艦式について論じるにあたって、まず観艦式とは

何か、どのような内容かについて解説を行う。

観艦式とは、一国の元首などが海軍艦船をあつめ、その威容を親閲する儀式のことを指し、世界各国で行われている。起源は1341年にイギリス国王が自ら艦船を率いて出撃する際に親閲したときとされる。日本では、1868年以降18回²⁾行われた。それを示したのが表1である。また戦後、現在の海上自衛隊も3年に1度程度の頻度で観艦式を行っており、内閣総理大臣が親閲している。本稿では戦前の日本海軍が行ったものに限定する。

観艦式は大きく分けて4つに分類できる³⁾。

まず、第1に最も多く行われている大演習観艦式である。これは、海軍が大演習の締めくくりとして行う観艦式である。海軍大演習は、時期によって海軍の演習を規定した「海軍演習令」⁴⁾の条文に差異はあるものの、概ね「一鎮守府及一艦隊以上の兵力を挙げ」「臨時」で行われるものとされている。特に、天皇が統監するものに関しては1901年以降「特別大演習」と呼ばれた⁵⁾。それらを一覧にしたものが表2である。1890年から1919年までは大演習と同時に観艦式が行われており、昭和期は特別大演習にあわせて3年に1度観艦式が行われていることが分かる。例外である1924年は、大正天皇の病状が悪く観艦式を開催できる状況でなかったことが推測される⁶⁾。

第2に天皇の即位の記念として行われる大礼観艦式がある。これは、大正天皇の即位⁷⁾と昭和天皇の即位にあわせて1915年と1928年に行われた。

第3に凱旋する艦隊を迎える凱旋観艦式があげられる。これは、日露戦争の凱旋と第一次世界大戦参加の艦艇を迎える⁸⁾際に行われた。

第4に恒例観艦式があげられる。これは、川村純義の1879年の建議を大正期に採用したもので、毎年観艦式を行うことを意図して計画・実施されたものである。詳細はIIIで述べる。

その他の形態で実施された観艦式としては、1868年の観兵式と1940年の紀元2600年特別観艦式があげられる。観兵式は江戸に向かう佐賀藩をはじめとした

表1 観艦式一覧

西暦	和暦	月	日	名称	場所	分類	備考
1868	明治元	3	26	観兵式	大阪天保山沖	その他	移動観艦式、日付は旧暦
1890	明治23	4	18	海軍観兵式	神戸沖	(演習)	
1900	明治33	4	30	大演習観艦式	神戸沖	演習	
1903	明治36	4	10	大演習観艦式	神戸沖	演習	
1905	明治38	10	23	凱旋観艦式	横浜沖	凱旋	
1908	明治41	11	18	大演習観艦式	神戸沖	演習	
1912	大正元	11	12	大演習観艦式	横浜沖	演習	
1913	大正2	11	10	恒例観艦式	横須賀沖	恒例	移動観艦式
1915	大正4	12	4	特別観艦式	横浜沖	大礼	演習実施も、直後に観艦式を行わず
1916	大正5	10	25	恒例観艦式	横浜沖	恒例	移動観艦式
1919	大正8	7	9	御親閲式	横須賀沖	凱旋	
1919	大正8	10	28	特別大演習観艦式	横浜沖	演習	
1927	昭和2	10	30	特別大演習観艦式	横浜沖	演習	
1928	昭和3	12	4	大礼特別観艦式	横浜沖	大礼	
1930	昭和5	10	26	特別大演習観艦式	神戸沖	演習	
1933	昭和8	8	25	特別大演習観艦式	横浜沖	演習	
1936	昭和11	10	29	特別大演習観艦式	阪神沖	演習	移動観艦式
1940	昭和15	10	11	紀元二千六百年特別観艦式	横浜沖	その他	

・「観艦式一覧」海軍省編『海軍制度沿革』14（原書房，1972年）（初出：1941年）を参考に作成。一部不適当と思われるものは、筆者が適宜修正した。

表2 主要演習実施一覧

西暦	和暦	開始		終了		演習種類	観艦式 有無	区域	備考
		月	日	月	日				
1885	明治18	3	8	3	11	小艦隊東京鎮台聯合演習	×	東京湾内外房相半島	
1889	明治22	3	25	4	5	大演習	×	東京湾口	
1890	明治23	3	28	4	2	海陸聯合大演習	○	伊勢湾附近	天皇親裁（統監は有栖川宮熾仁親王）
1900	明治33	3	27	5	2	大演習	○	東経130度より136度に至る 北緯30度より35度に至る	区域はおおよそ四国沖外洋
1903	明治36	3	10	4	10	大演習	○	東経125度より136度 北緯30度より40度	区域はおおよそ四国外洋及日本海
1908	明治41	10	18	11	19	大演習	○	九州沿岸並に南西諸島	
1912	大正元	10	21	11	7	大演習	○	本州、四国及九州南方海洋	
1915	大正4	10	18	11	1	大演習	△	九州東岸及南西諸島より 本州南岸に至る間	演習直後ではなく、一ヶ月あけてから大礼観艦式
1919	大正8	10	11	10	28	特別大演習	○	本州、四国及九州南方海面	天皇は勅命をもって軍令部長を統監に指名
1924	大正13	10	2	10	24	大演習	×	本邦附近の海面	大正天皇の病状が関係か
1927	昭和2	10	11	10	30	特別大演習	○	本州南岸附近及南方海面	海陸合同
1930	昭和5	10	10	10	26	特別大演習	○	日本南方海面	
1933	昭和8	6	1	8	25	特別大演習	○	本邦南方海面	
1934	昭和9	8	1	10	21	大演習	×	本邦附近南海	
1935	昭和10	11	9	11	12	特別大演習	×	九州南方方面	海陸合同
1936	昭和11	8	1	10	29	特別大演習	○	本邦南方海面	

・「主要演習実施一覧表」海軍省編『海軍制度沿革』14（原書房，1972年）（初出：1941年）を参考に作成。

・演習が前期，後期と分れている場合は観艦式に関する後期演習の日程，区域のみを表記した。

藩の船を天皇が見送ったものであり、激励の意味合いの観艦式である。紀元2600年特別観艦式は紀元2600年の奉祝行事の1つとして計画・実施された。

以上が観艦式の種類である。また、観艦式の実施の方法には碇泊・移動の2種類があるため、これらについても説明する。

まず碇泊観艦式は天皇が親閲する艦船が碇泊した状態でその間を御召艦（天皇が乗艦する船）とそれに従う供奉艦が各艦船の間を通り親閲するというものである。日本海軍の観艦式において、大多数はこちらの形態で行われている。

移動観艦式（運動観艦式と表記することもある）は、天皇が親閲する艦船も動き、動かしている様子を天皇が親閲するという形態で行われる。この形態で行われたのは、1868年観艦式、大正期の恒例観艦式の2回、1936年阪神沖観艦式の全部で4回である⁹⁾。

III 恒例観艦式の構想と挫折

1913年9月30日、海軍大臣齋藤実は山本権兵衛首相に恒例観艦式の実施に関し上申を行った。これを示すのが次の史料¹⁰⁾である。

恒例観艦式ノ件

明治三年一月十一日海軍始ノ式ヲ行ハセラレシヨリ年頭ノ御式中ニ之ヲ加ヘラレ、爾来例年一月九日（明治四年ニハ一月八日）ヲ以テ式日ト定メラレタリシカ、別紙写ノ通明治十一年限りノ之ヲ廃止セラレタル今日ニ至リ候処、国運ノ隆興ニ伴ヒ海軍亦日ニ月ニ駸々トシテ進歩シツツアル状勢ニ鑑ミ、且曩ニ海軍始ノ式ヲ廃止セラレタル当時春秋ノ二季艦隊運動等 叡覧ノコトヲ稟伺シタル次第モ有之、左記ノ要領ニ依リ毎年恒例観艦式ノ儀被 仰出候様相成候ハハ、士氣ヲシテ益々感奮興起セシムル所以ト信シ候間、此際恒例観艦式御治定アラセラレ候様致度

この中で、海軍始の式が廃止されたため、それに代わるものとして春秋2季の艦隊運動展覧を稟請したとあるのは、川村純義が1879年に行った建議¹¹⁾である。川村はこの建議の中で、「恒例」として、毎年1度「艦隊操練」を天皇が親臨することを上申している。「艦隊操練」とは、移動観艦式のことを指している。結局、1879年の時点でこの構想は実現せず、実現は1913年を待つことになった。

恒例観艦式の実施内容については、毎年11月10日に東京湾において「在役並に予備艦艇の大部」をもつ

て移動観艦式を行うと、齋藤実から山本権兵衛へ上申があった¹²⁾。これに対し、日程に関しては毎年の事情によって変更の可能性があると言われた¹³⁾が、この内容を踏襲する形で「観艦式規程」¹⁴⁾が制定された。

では、何故川村純義の1879年の建議を34年も経った1913年に実現することになったのだろうか。前述の齋藤実から山本権兵衛の上申中では、海軍が進歩している状況に鑑み士気をあげるために恒例観艦式を制定するとしている。これにはどのような意味合いが含まれているのであろうか。

海軍内部の史料では、これ以上明確に恒例観艦式について言及されていない。ただ、恒例観艦式が創設された理由について、朝日新聞の社説¹⁵⁾では次のように述べられている。

海軍当局者に於ては、陸軍の大演習が毎年举行されて、天皇陛下の臨御を仰げるに、海軍の観艦式のみ数年を隔て、之を行ふは、海陸軍の権衡上面白からずと感じたる者の如く、本年よりして毎年観艦式を举行して、陛下の行幸を仰ぎ奉る事となし、之を恒例観艦式と命名し、其式場の如きも是れ迄神戸、横浜の両地に限られしを拡張して、今回は特に木更津沖を選定したり。

このように、陸軍の大演習が毎年举行されているのに対抗する意図があるのではないかと朝日新聞は推測している。更に前掲の朝日新聞社説の後半では、次のように述べられている。

木更津沖は本日をも以て前代未聞の盛況を呈するならん。世間或は此挙に反対する者あり。少からざる費用を擲ちて毎年此の無用なる観艦式を举行するの愚を嘲り、甚だしきは此恒例観艦式を以て政府が海軍拡張に資せんとする一種の政略なりとの疑ひを抱く者あり。吾人も亦此点に付いては未だ政府の真意如何を確知する者に非ずと雖も、言ふ迄もなく海軍拡張と観艦式とは自から別問題ならざる可らず。

以上のように、ただ陸軍に対抗する意識があるのみでなく、「政府が海軍拡張に資せんとする」ために行っていると指摘されている。この時期は、海軍が八・八艦隊の建設をはじめとした軍拡に着手し、初の海軍出身首相山本権兵衛の元で海軍が政治への進出を果たした時期と重なる¹⁶⁾。このため、恒例観艦式の制定も「政略」の一種として制定されたとする報道もあったのである。

また、恒例観艦式の制定は別の面からも批判がなされている。それが次の史料¹⁷⁾である。

帝国海軍は今回恒例観艦式の新例を制定し、爾後毎年十一月十日を以て之を行ふことゝなれるが、右は多分、陸軍が毎年秋季機動演習の後を受けて特別大演習を行ふを恒例とするに倣ひたるものなるべけれど、斯かる形式上にまで海陸均衡論を持出して競争を事とするに至りては、実に浩歎の外はあらず、此が為め艦隊は九州沿海に於ける聯合演習後態々観艦式参加の為め舳艫相衝んで東京湾頭に回航し来り、式後間もなく兵員補充の必要上各所属軍港に帰着せざるべからずして、之に要する石炭消費量丈にても決して尠少に非ず、尚其他の雑費を合算するとき、式挙行に要する経費は蓋し意外の多額に達すべく斯かる御祭騒動に毎年多額の経費を煙にするが如くんば、折角の整理節約も何等の甲斐なかるべく、帝国海軍は平時に於て移民保護の重任を負へども何分経費の都合にて思ふに任せずとは毎々諸氏より聞く所なるが、斯る冗費あらば毎年艦艇の一二隻は南洋なり南米なりの方面へも派遣し得らるゝ道理ならずや云々（某少壮将校談）

前述の社説と同様にこの将校は、陸軍演習に対抗するものとするが、そのような形式上の「海陸均衡論」を出して、「御祭騒動」に多額の経費を無駄にするべきでなく、移民保護のための船を派遣すべきだとしている。この指摘は最後に「某少壮将校談」とあるように、単なる新聞上の批判ではなく、海軍内部の人物が新聞社に話した内容であり、海軍内部にも恒例観艦式を積極的に進める意見と、移民保護など他のことに資金を投入するべきであるとの意見の2つがあったことをうかがわせる。また、この史料中では、燃料に対する懸念についても触れられている。このように燃料に対して懸念を示すのであれば、碇泊観艦式の形態である方が燃料は消費しないため適しているが、恒例観艦式はすべて移動観艦式の形態で行われている点にも留意が必要であろう。

以上の点から、前述の斎藤の上申中の海軍の進歩は軍拡を、士気を上げるという文言は、陸軍への対抗意識から作成されたものと考えられる。しかし、それには内外からの批判を伴ったのである。

第1回の恒例観艦式は横須賀沖（非公式には木更津沖とも表記された）で行われた。ここまで横浜沖で行われていた観艦式が横須賀沖で行われたのは、当時横浜でコレラが発生しており、宮内省から式場を変更するように申し入れがなされたためである¹⁸⁾。しかし、前述の朝日新聞の社説にあるように会場の変更は観艦

式を「拡張」した結果であると評価するような報道も見られた。移動観艦式の形態で行われた結果、会場海面は横須賀の9哩沖とされ¹⁹⁾、陸上から民衆は一切観艦式を拝観することが出来なかった。このため、観艦式を拝観するためには、海軍が手配した拝観船に乗るか、自ら船を出して会場海面近くまで行くかの2つしかなかった。海軍が手配した拝観船は非常に少なく、また乗船にも海軍や官公庁の関係者であることなどが条件であった²⁰⁾ため、第1回の恒例観艦式を拝観することは非常に困難であった。

こうして創始された恒例観艦式であったが、翌年は実施されなかった。理由は、当初昭憲皇太后の諒闇中のためであるとされた²¹⁾が、その後第一次世界大戦のためである²²⁾と報道がなされるようになった。翌年は大礼の特別観艦式が行われ、1916年に2度目の恒例観艦式が行われた。この年の観艦式では、前回横浜沖で行うことが出来なかった反省から神奈川県としても防疫に力を入れ、天皇が行幸する道筋の人々の予防接種（6183人分）、採便検査（2054人分）を行った²³⁾。1917年には射撃訓練遅延のため恒例観艦式は行われず²⁴⁾、1918年は大演習・小演習が中止となり、あわせて観艦式も中止となった²⁵⁾。このように、海軍として批判を受けながらも立ち上げた恒例観艦式の制度は、その後熱心には行われていない様子うかがえる。

1919年10月、恒例観艦式は廃止に至った。1913年に創始されたが、僅か2回の開催で廃止されたのである。廃止の際に海軍大臣加藤友三郎から原敬首相に出されたのが次の史料²⁶⁾である。

恒例観艦式廃止ノ件

恒例観艦式挙行ノ儀ニ関シ、去大正二年九月三十日附官房第二六二二号本大臣ヨリノ稟請ニ対シ、内閣批第二二二号ヲ以テ稟請ノ通上奏ヲ経タル旨通牒ノ次第モ有之候処、累年実験ノ結果恒例観艦式挙行ノ儀ハ之ヲ廃止セラルルヲ適当ト認メ候条右廃止ノ件上奏方可然御取計相成度

「累年実験ノ結果」、恒例観艦式を廃止するのが適当であるとしている。では、恒例観艦式の何が原因で廃止となったのであろうか。

まず、海軍内部の見解としては、1916年の2回目の恒例観艦式の終了にあたって提出された総合意見が参考になる。それが次の史料²⁷⁾である。

大正五年恒例観艦式ニ関スル綜合意見

一、恒例観艦式ヲ小演習ノ一部トシ演習計画中ニ観艦式ヲ入ルルコト恰モ大演習後ニ於テ行ハルル大

演習観艦式ノ如クナラシメントスル説アリ、今回ノ如ク演習参加艦艇ト観艦式参列艦艇ト同一ニシテ、且其ノ挙行期日モ相接近スルトキハ艦隊ノ編成、指揮官ノ任命其ノ他演習経過ノ奏上等ニ於テ利便多ク諸事好都合ナルヘシト思考サルルヲ以テ、審ニ観艦式事務上ニ於ケル便否ヲモ考察シ要スレバ観艦式規程ヲ本説ニ合スル如ク改正スルヲ可ナリト認ム

以上のように恒例観艦式を大演習観艦式と同じ形態で行うべきだとする意見があることが分かる。恒例観艦式は規定には書かれていないにもかかわらず、すべて小演習²⁸⁾と共に行われていた²⁹⁾。恒例観艦式の参列艦船もほぼ小演習に参加した艦船となっている。それにもかかわらず、大演習観艦式とは異なり演習の日程と観艦式の日程が別で設定されており、小演習から観艦式までの期間が短いなどの批判も出されている³⁰⁾。このため、演習とともに行い日程を調整する大演習観艦式のようにするべきだという意見が出されたのである。これ自体は直接恒例観艦式の廃止を訴えるものではないが、前後の恒例観艦式を熱心に行っていない様子と考え合わせると、この意見にあわせて恒例観艦式を廃止し、大演習観艦式に一本化したと考えられる。

また、廃止の理由として地元神奈川において恒例観艦式への関心が低いことがあげられる。これは移動観艦式の形態が大きく影響したと考えられる。1913年の1回目の恒例観艦式は陸上から観覧することは困難で、自ら船を出して拝観することしかできず、しかも拝観船の事故が複数発生している³¹⁾。このことから、移動観艦式を観覧するのは難しいという認識が生まれたためか、1916年の恒例観艦式では、前年の大礼観艦式に比べ拝観船の数が少ないと報道されている³²⁾。また、神奈川県地方新聞である『横浜貿易新報』ですら、1916年の2回目の恒例観艦式を「恒例第一次」の観艦式だとして誤った報道している³³⁾ことから、恒例観艦式という制度への注目度の低さがうかがえる。

以上のような事情を受けて、恒例観艦式は1919年の観艦式規程の改正に伴い廃止された。

IV おわりに

以上本稿で述べてきたように、恒例観艦式は陸軍の特別大演習に対抗して創設されたが、わずか2回の開催で廃止された。この背景には、新聞報道・海軍内での反対意見や、地域での関心の低さ、小演習とともに

実施しており大演習観艦式と大差がないことがあると考えられる。恒例観艦式が廃止された1919年以降、大正期に観艦式は行われず、昭和天皇による観艦式の時代になってゆく。

本稿では恒例観艦式の問題に焦点をあてたが、今後はこの後の時代の特別大演習観艦式に焦点をあて、海軍と地域の問題を考えていきたい。

付記

本プロジェクトは申請当初「近代日本における海軍と地域社会—観艦式を事例に一」と題して、観艦式と地域との接点について言及する予定であったが、観艦式の基礎的事項に関する検討を優先させたため、本報告書では「大正期における日本海軍の恒例観艦式」というタイトルに変更したことをここに断っておく。

注

- 1) 福田理「1930年代前半の海軍宣伝とその効果」(『防衛学研究』44, 2005年), Tフジタニ『天皇のパーセレント』(NHKブックス, 1994年)など部分的に扱っている研究はあるが、観艦式そのものについて詳細な検討を加えている研究は管見の限りない。
- 2) この回数に関しては、各資料で異なっているが、本稿では、1940年以降海軍が公式に認め、かつ天皇が親閲を行った18回を採用する。
- 3) 以上の区分に関しては主に『海軍制度沿革』14(原書房, 1972年)(初出1941年)を参照した。一部制度沿革からは判別できなかった部分に関しては適宜史料を参照して補った。
- 4) 「海軍演習令」にあたるものは時代によって呼称が異なるが、『海軍制度沿革』14中で節名になっている「海軍演習令」をここでは使用する。
- 5) 海軍省「海軍演習概則(海軍演習規則)」前掲『海軍制度沿革』14, 799~841頁。また、1920年の改定により、「特別大演習は勅命に依り海軍軍令部長をして之を統裁指導せしむることあり」の条文を追加し、天皇自身が統裁しなくても、特別大演習の表記は可能となった。
- 6) 実際、大正天皇が最後に行った1919年の大演習では、体調不良のため戦艦摂津に「軍艦として不相応の設備」までして臨んだにもかかわらず、演習終了時の勅語は天皇自身が朗読することができなかった(古川隆久『大正天皇』吉川弘文館, 2007年, 189~190頁)。
- 7) 鈴木暢幸, 小松悦二編『御即位大典録』後編(御即位大典記念会, 1915年)540~546頁。
- 8) JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. A06050615000, 『枢密院文書・宮内省往復・稟議・雑書・大正8年』(国立公文書館)。
- 9) 『昭和天皇実録』7(東京書籍, 2016年)では、1936年の移動観艦式を「我が国初」と説明しているが、これは誤りである。実録が誤った記述をした要因としては、1936年観艦式に関して神戸市長が、「我海軍創始以来最初ノ移動観艦式」(『昭和十一年海軍特別大演習観艦式神戸市記念誌』神戸市役所, 1937年, 20頁)と発言したことがあげられる。
- 10) 「恒例観艦式ノ件」前掲『海軍制度沿革』14, 900頁。
- 11) 「恒例及臨時御親閲二関スル件」前掲『海軍制度沿革』14, 899頁。
- 12) 同注9。

- 13) JACAR, Ref. A13100058000 『公文類聚・第37編・大正2年・第8巻・族爵・爵位・勲等, 儀典・儀礼・服制徽章』(国立公文書館)。
- 14) 「観艦式規程」前掲『海軍制度沿革』14, 896頁。
- 15) 「恒例観艦式(社説)」『朝日新聞』(1913年11月10日, 朝刊3面)。
- 16) 坂野潤治『大正政変』(ミネルヴァ書房, 1994年)。ただし, 海軍として予算は獲得出来たもののほとんどが維持費にあてられ, 実質的な予算獲得には失敗したとする評価もなされている(室山義正「日露戦後財政と海軍拡張政策―「八・八」艦隊構想の財政課程―」原朗編『近代日本の経済と政治』山川出版社, 1986年)。
- 17) 「恒例観艦式に就て」『朝日新聞』(1913年10月11日, 朝刊2面)。
- 18) JACAR, Ref.C08020241500, 『大正2年・公文備考・巻9・儀制5・恒例観艦式1』(防衛省防衛研究所), 画像13。
- 19) 「海上の偉観」『横浜貿易新報』(1913年11月11日, 朝刊1面)。
- 20) JACAR, Ref.C08020244400~C08020245100, 『大正2年・公文備考・巻11・儀制7・恒例観艦式3』(防衛省防衛研究所)。
- 21) 「恒例観艦式延期」『読売新聞』(1914年9月29日, 朝刊2面)。
- 22) 「恒例観艦式中止」『読売新聞』(1914年10月4日, 朝刊2面)。
- 23) 神奈川県警察部『大正五年神奈川県虎列刺流行誌』(1917年)87頁, 横浜市立中央図書館蔵。
- 24) 「恒例観艦式取止」『朝日新聞』(1917年9月18日, 朝刊5面)。何故射撃訓練が遅延したのか等の詳細については触れられておらず, 管見の限り公文書からも確認できなかった。
- 25) 「艦隊戦闘射撃」『読売新聞』(1918年9月9日, 朝刊2面)。
- 26) JACAR, Ref. A13100362900, 『公文類聚・第43編・大正8年・第14巻・族爵・爵位・勲等, 儀典・儀礼・服制徽章』(国立公文書館)。
- 27) JACAR, Ref. C08020744400, 大正5年11月6日~大正5年11月15日『大正5年・公文備考・巻14・儀制12』(防衛省防衛研究所)。
- 28) この時期の小演習は「小演習ハ艦隊ノ大部及鎮守府要港部所属艦船ノ一部ヲ以テ演習艦隊ヲ編成シ毎年一回秋季ニ之ヲ施行スルモノトシ其ノ期間ヲ七日乃至十五日トス」と定められている(「海軍演習規則」前掲『海軍制度沿革』14, 810~812頁)。
- 29) 1913年の場合 JACAR, Ref. C08020241400, 『大正2年・公文備考・巻9・儀制5・恒例観艦式1』(防衛省防衛研究所) 画像11・12, 1916年の観艦式の場合は, JACAR, Ref. C08020739800, 『大正5年・公文備考・巻12・儀制10』(防衛省防衛研究所) より小演習と共に行っている様子が確認出来る。なお, 両演習とも観艦式参列艦船と演習参加艦船はほぼ同一である。
- 30) JACAR, Ref.C08020241400, 『大正2年・公文備考・巻9・儀制5・恒例観艦式1』(防衛省防衛研究所)。
- 31) 「観艦式見物船品川沖に遭難」「海城中学生木更津沖に漂ふ」『横浜貿易新報』(1913年11月12日, 朝刊1面)。
- 32) 「海上の大警戒―本年は拝観船少し―」『横浜貿易新報』(1916年10月25日, 朝刊1面)。
- 33) 「観艦式御視閲」『横浜貿易新報』(1916年10月26日, 朝刊1面)。